

秋成浮世草子の研究 主論文要旨

はじめに

上田秋成の浮世草子『諸道聴耳世間狙』『世間妾形氣』の概要、従来の評価、および先行研究を紹介し、本論文のめざすところを説く。

第1章 『諸道聴耳世間狙』とその周辺

第1節 『諸道聴耳世間狙』の笑話的方法

延広真治氏「講釈・落語と文学」に、秋成の浮世草子に「ハナシの方法」が用いられるとの指摘がある。ここではその見解に関し具体的な考察を試み、同時代に上方で刊行された噺本を主な資料として、『諸道聴耳世間狙』と笑話との比較を行った。

『世間狙』には登場人物の一言が「落ち」となる短い場面が散見する。そのうちの巻三の二には、「(船頭も)ぬからず」という笑話に多用される表現が用いられている。また、巻一の三の末尾に親に向かって「いやしき海士の胎内に」と謡曲「海士」を謡う場面があり、この場面の類話を同時代の複数の噺本に見出すことができる。これは秋成の周辺で実際に語られていた笑話を作品に取り込んだものと考えられる。さらに同様の場面を作中に探れば、巻二の三の話の末尾に謡曲「景清」が本来の文脈と全く別の場面で謡われる箇所があり、巻三の三にはある登場人物の話が狂歌にて締めくくられるという、複数の笑話に見られる手法が用いられている。また、これらはいずれも謡曲という当時多くの人々が共有していた知識を前提とする表現方法でもある。

ついで歌舞伎、操り芝居などの演劇、浄瑠璃などの音曲が作中に用いられる例について検討した。巻二の一では貧乏神の台詞に『ひらかな盛衰記』が利用されることが神楽岡幼子氏『『諸道聴耳世間狙』と歌舞伎』に指摘されている。同様の台詞は同時代の洒落本の登場人物の会話にしばしば登場することから、当時よく知られていたものと考えられる。『ひらかな盛衰記』は、同時代の笑話に頻繁に素材とされる作品であった。また巻二の二では、不信心者の息子が父親に強いられた念仏を音曲で以て誤魔化す場面がある。ここで利用される「山アにぞ着にけり」という一節は、国太夫節（宮古路節）で詠われる心中の道行きの結びである。心中の道行を詠うことの多いこの国太夫節は、談義本や笑話の素材になることの多いものであった。念仏の末尾の回向文として道行き末尾のこの言葉を宛てることによって、その落差を笑ったのである。

最後に、『世間狙』の地の文に、他の同時代作品では登場人物の発話部分に用いられる言い回しが見出せることを指摘した。前節で考察した『加古川本艸綱目』が一話ごとに語り手を明確に設定する一方で、『世間狙』には語り手が存在しない。語り手を設定することなく、「ハナシの方法」と口調とを敢えて作中に残していることが、『世間狙』の特色であると結論付けた。

第2節 『諸道聴耳世間狙』と『加古川本艸綱目』—モデル小説の方法

『諸道聴耳世間狙』の同時代作品であり、秋成と同じ大坂の作者の手になる浮世草子『加古川本艸綱目』に関して、『世間狙』と同じくモデル小説の方法を用いる作品であることを指摘する。

『加古川本草綱目』では、『仮名手本忠臣蔵』の登場人物たちが気鬱になった大星由良之介を慰めるため、「のら」と呼ばれる人々の話を交代で語る。「のら」とは同時代の大坂の作品にしばしば描かれる、当代の文化人を含む遊人を指す。また、『加古川本艸綱目』は目録題に多田南嶺の浮世草子『教訓

我侬育』の後篇を標榜し、さらにその正篇である南嶺の『鎌倉諸芸袖日記』より、貴人に対する伽を通して話を綴る方法を踏襲している。別題は『教訓能楽氣質』といい、当代の「のら」の様々な有様を描く気質物浮世草子である。

『世間狙』については、その登場人物が当時の大坂に実在した有名人をモデルとすることが中村幸彦氏「秋成に描かれた人々」（『中村幸彦著述集』第6巻所収）に指摘され、その後、登場人物のモデルの多くが明らかにされた。『世間狙』の二年後に刊行された『加古川本艸綱目』も同様に実在人物をモデルとし、その一部を『世間狙』と共有する。具体的には、「正慶尼」「上田近江」「江崎茂左衛門」「うりう」の少なくとも四名が『世間狙』と『加古川本艸綱目』に共通して描かれる。これらを含め、『加古川本艸綱目』に描かれる人物を（Ⅰ）『諸道聴耳世間狙』と共通するモデル、（Ⅱ）「同時代資料より、モデルと推定できる人物」、（Ⅲ）「人物名の類似からモデルと推定できる人物」の三つに分け、作品中の登場人物四十名余りのうち、計十二名のモデルを明らかにした。

『世間狙』と『加古川本艸綱目』とは、南嶺の浮世草子よりモデル小説の方法を学ぶ点が一致する。同時代の大坂では洒落本『列仙伝』や『雅仏小夜嵐』など実在人物を登場させる作品が複数成立しており、それらもまた先行作品の方法を利用している。『世間狙』と『加古川本艸綱目』もこの一つと捉えるべきもので、これらの作品は当時の大坂の人々を楽しませた「仙人噺し」、すなわち有名人の噂話を作品化したものと考えられる。『世間狙』『加古川本艸綱目』における南嶺作品の方法は実在人物を描くという目的に即して選ばれたものである。

第2章 『世間妾形氣』

第1節 『世間妾形氣』巻二の三考 一物語の題材と「志賀寺の上人」説話の典拠について

『世間妾形氣』巻二の三「若後家の寺参りはてつきり仕立物やの宿替」（以下「本話」）について、近世の先行作品から話の題材を探るとともに、話中に用いられる「志賀寺の上人」説話の典拠、利用方法、および題材との関わりを論じた。

本話では後家が生臭坊主の妾となり、その後家と弟による、坊主を狙った「美人局」が描かれる。後家と坊主の密通は近世の早くから見える題材である。また、先行の浮世草子『傾城仕送大臣』巻三の四に、坊主相手の妾と、坊主に対する美人局についての記述がある。この記述から近世において坊主に対する美人局が実際に行われたことがわかる。

また、本話では美人局に合う六人の生臭坊主がそれぞれ強烈な破戒僧として描かれる。このことは、同時代に江戸を中心に流行した談義本において、浄土宗、浄土真宗などに対する仏教批判が頻繁に行われたことと関係すると考えられ、『妾形氣』の生臭坊主も浄土宗であることが本文中の記述より知られる。この人物造形によって、憎むべき生臭坊主が美人局に遭うという結末が、面白味を増している。

次に、本話に利用される「志賀寺の上人」説話に関して考察を行った。これについては井上泰至氏「秋成の浮世草子と『艶道通鑑』」に先行の談義本『艶道通鑑』を媒介すると指摘されている。また、同氏の指摘の通り、冒頭に置かれる和歌「極らくの玉の台のはちす葉にわれをいざなへゆらく玉の緒」は、仮名草子や歌論書などに通行の「よしさらばまことのみちのしるべしてわれをいざなへゆらく玉の緒」の形ではなく『艶道通鑑』に見える形を採っている。しかし、和歌の直後の文中に『艶道通鑑』にない「真（まこと）の道」の語があることから、秋成自身は通行の歌型を把握していた可能性が高い。さらに、『艶道通鑑』で「志賀寺の上人」とされている人物名を本話は「志賀寺の老法師」とする。これは『俊頼髓脳』『古来風体抄』などの歌論書に見える言葉である。よって、秋成は『艶道通鑑』と

同時に歌論書によってこの説話を知っていたと考えられる。秋成は雅俗両方の資料で「志賀寺の上人」説話を知りながら、本話の引用元として敢えて通俗的な『艶道通鑑』を選んだのである。

本話において、秋成は「志賀寺の上人」説話を卑俗化し、新たな話を作り上げた。「志賀寺の上人」と「京極の御息所」の関係を、生臭坊主と後家の密通に置き換え、「上人」と「御息所」が互いに極楽浄土への縁を得るという説話を、後家が生臭坊主から美人局によって新宅をだまし取る卑俗な物語へと変えたのである。

『妾形氣』執筆にあたって、秋成は歌論書にも目を通していた可能性があり、その上で雅俗の資料を柔軟に使い分けている。また、「真の道」「老法師」などの語を取って文中に用いることにより、古典の知識のある読者にのみわかる「遊び心」を加える点は、『妾形氣』の古典利用の方法として注目に値する。

第2節 『世間妾形氣』最終話と伏見

『妾形氣』最終話（巻四の三）「貧苦しぼる油扇の絵」（以下「本話」）の舞台としての伏見の描かれ方と、舞台設定の意義とを論じた。

伏見は西鶴の『好色一代男』以降、頻繁に浮世草子の舞台となった土地である。本話では、先行の浮世草子の伏見を舞台とする話に見られる伏見の特色が網羅的に描かれている。それらの特色の中には話の展開や人物設定に密接に関わるものもあれば、話の展開には直接関係しないものもある。

さらに、本話中の遊郭と洪水の描写について、当代性、写実性を重視した描写がなされていることを指摘した。遊郭については、『妾形氣』刊行当時、古くから有名な伏見の遊郭・鐘木町が廃れ、中書島の遊郭がにぎわいを見せていたことが同時代資料からうかがわれ、本話の描写もそれを反映したものとなっている。また、『妾形氣』刊行の二年前、明和二年に京都を中心に大雨があり、伏見も洪水に見舞われていることが留意される。とはいえ本話における洪水の描写は必ずしも明和二年の洪水の記録と一致しないため、これを念頭に置きながらも、単に洪水が多いという伏見の特色を話中に利用したものと考えられる。同じく伏見の洪水を描く作品に浮世草子『商人軍配団』があるが、これと本話における洪水の描写とを比較すると、本話では堤が決壊した場所の地名などがより詳細に描かれており、写実性を重視した描写と考えられる。

また、本話における登場人物の生業が当時の伏見に根付いていた産業に関係するということを指摘した。本話の中心人物である浪人・伊右衛門の「油扇の画工（えかき）」、相借家に住む人物の説明に出る「文珠四郎」「三嶋海苔」などについて、同時代資料により、いずれも伏見の名産と関係することが知られる。このように話の細部の人物設定までもが伏見の特色に結びつけられていることは注目される。

最後に、『妾形氣』の最終話である本話において伏見がその舞台となることの意義について考察した。西鶴作品においては、伏見がかつて繁栄し、後に廃れた場末の土地として描かれる。さらに秋成晩年の随筆『胆大小心禄』により、秋成も同様の認識を抱いていたことがわかる。また、先行の浮世草子『浮世親仁形氣』の最終話では江戸の金杉が舞台となり、金杉に住む親仁が娘の出世によって幸せを手に入れる。金杉は当時、伏見と同様に貧しい者の暮らす場末の土地とみなされていた。末尾を祝言でしめくることが近世の読み物の慣例だが、その舞台を場末の土地に設定することにより、登場人物がそこから榮転する結末をひきたてている。本話において伏見を舞台としたことは、話の末尾の祝言を考慮に入れた設定である。

第3節 『世間妾形氣』遊女藤野の貞女像 — 「女ゴらしき人」の意味するもの

『妾形氣』巻三の二、三（以下『妾形氣』目録に従い「第七」とする）の登場人物、遊女藤野の人物像に関し、文中の「女ゴらしき人」という表現を手がかりに考察を加えた。

はじめに、秋成の著述から「女らしい」「女じみた」という意を持つ言葉の用例を探った。その例は万葉集研究書『金砂』『檜の柚』に多く見られ、特に『檜の柚』の万葉集35番歌、108番歌などの評には、夫を一途に思う心を「めめし」「をみなし」と表現する例がある。この夫を一途に思うという点は『妾形氣』第七の藤野に通ずる要素である。

また、万葉集16番歌、額田王の春秋の優劣をうたう歌は秋成の著述に頻繁に取り上げられるが、秋成はこれについて「女の情」「をみなし」という語を用いて賞賛を寄せている。その一方で、『更級日記』の同様の場面で、秋に心を寄せる人と同じように言うまいという「まけじ心」で春を頌える歌を作った孝標女を「女々しからぬ」と批判する。額田王の和歌は詠み手の素直な心情が表れていると、秋成は、和歌そのもの以上に額田王の揺れ動く心情を重視する（『金砂』『檜の柚』）。これも秋成の「女らしさ」を考えるにあたって重要な要素であり、『妾形氣』第七の藤野もまた、夫と親方の提案の間で揺れ動く様子が描かれる。

次に、同時代作品と秋成の作品両方から「女らしい」「女じみた」とは逆の意味を指す言葉を探り、考察を行った。第一に都賀庭鐘の『繁野話』第八「江口の遊女薄情を憤りて珠玉を沈む話」に描かれる遊女白妙には「男と見ゆ」という語が用いられる。これは白妙の俠気と結び付き、『繁野話』第八において、白妙は男に見捨てられた後、海賊に身を任せることを拒んで迷い無く命を絶つ。第二には秋成の『ますらを物語』の、登場人物「弟姫」に対し、「をみなしからぬ」という語が用いられる例を検討した。「弟姫」もまた、男へ操を立てるために実の兄の手にかかり命を落とすことを選ぶ。これらの人物の性格は『妾形氣』第七の藤野とは対照的である。

最後に、かねてより藤野との類似が指摘される『雨月物語』「浅茅が宿」の「宮木」について述べた。「浅茅が宿」には万葉集に見られる「真間の手児女」の説話が利用される。「手児女」について、「浅茅が宿」は「をさなき」、『金砂』は「めめしき」という語を用いている。これは雅文「落葉」で「こめいたる」とされる額田王への評価に通じる。一方、「浅茅が宿」では「宮木」の最期が「手児女」により「幾らをかまさりて悲しかりけん」とされる。これは「宮木」と「手児女」の心の動きを異なるものと捉えた表現である。『妾形氣』第七の藤野は秋成の評価の上で額田王や「手児女」の側にあると考えられ、「浅茅が宿」の「宮木」とは異なる性格を持つといえる。

おわりに

『諸道聴耳世間狙』『世間妾形氣』の同時代における評価と、本稿の各節において意図したこと、今後の展望について述べる。